

# 幼稚園・保育園でのABA

2009/11/13 神戸定例会

藤坂龍司

## 1. 幼稚園・保育園生活の意義

- ・「集団の力」を過信しない。自閉症児の多くは、集団の中に援助なしではおこいこいでも、それだけでは改善しない。
- ・まず家庭で半年から一年、みっちり療育を行い、その後、徐々に「シャドー」付きで健常児の集団の中に入れて行くのが望ましい。
- ・すでに幼稚園・保育園に通っている場合は、帰宅後、家庭療育をし、その成果を園生活に生かす。
- ・園は家庭療育で身につけたことを般化する場。また新たな課題を見つける場でもある。
- ・通園施設も保育園とよく似ているが、違いは健常児のモデルがないこと。しかしスタッフが多いので、身辺自立などが身につけやすいかも。
- ・シャドーが断られた時は、やむをえず園の先生や介助員にお任せする。ABAを学んでもらえればベスト。

## 2. 幼稚園・保育園への働きかけ

- ・親がシャドーに付く意志がある場合は、半年～一年くらい前から希望の園に交渉を開始する必要があるだろう。
- ・わが家の場合は、入園前の夏休みに、入園予定の公立幼稚園を夫婦で訪問し、園長に「親がシャドーとして付添いたいので、認めてほしい」という要望を伝え、その趣旨の文書（A4, 1枚）を手渡した。後日、教育委員会にも出向いて、同じ文書を手渡した。それっきり何もしなかったが、1月になって受け入れの返事がきた。
- ・公立幼稚園は比較的認められやすいと思うが、私立の場合は、経営者の考え次第なので、断られた場合、覆すのは難しいだろう。
- ・シャドーが認められなかったり、初めから家庭の事情でシャドーに付くことが難しい場合は、介助員をつけてもらうように要望する。

## 3. シャドーの心得

### (1) ABAにおけるシャドーの意義

- ・「シャドー」とは、集団教育において障害を持つ子どもに1対1で付添い、援助をする者のこと。
- ・ABA早期集中療育では、最初の半年から1年程度、家庭で集中的に療育を行ってから、シャドーの付添い付きで少しずつ集団の中に入れていく。
- ・その場合のシャドーは、ABAを熟知し、かつ家庭療育で子どもが何を学んでいるかをよく知っている者、つまり子どものセラピストでなければならない。幼稚園側がつける加配や介助員では、十分とはいえない。
- ・親は子どもが依存しやすく、シャドーとしてベストではないが、セラピストがいない場合やセラピストの付添いを（しばしばそうであるように）園が認めない場合は、次善の策としてやむをえず親が

シャドーとなる。特につみきの会ではその例が多い。

#### (2) シャドーとしての援助の仕方

- ・最初は全介助（フルプロンプト）に近い感じで、付きっきりで指導する。最初から先生に遠慮して、離れたところで見えていたりしてはいけない。そばか後ろにぴったりくっつくこと。
- ・できるようになったものから、徐々にプロンプトをフェーディングしていく。最後はシャドーそのものがフェードアウトすること（つまりシャドーの終了）が望ましい。
- ・あまりあれもこれもと欲張らず、各場面ごとにターゲット（標的行動）を絞り込む。そのターゲットに介入し、効果を観察する。
- ・基本的にはシャドーに徹して、他の子どもとはあまり関わらない。ただし他の子どもたちを巻き込んで、子どもをその輪の中に入れるために積極的になる分には考えない。

### 4. 園での援助の仕方

#### (1) 援助が必要な場面

- 朝とお帰りのルーティーン（ノートを出して、かばんをロッカーに入れて…）
- 着席行動・すわって待つ
- お返事する（〇〇くん、はい）、指示に従う
- 要求を伝える（ことば、サイン）
- 手遊び歌・体操
- お絵描き・工作（はさみ・のり）
- 食事場面（手洗い、スプーン・フォークの使用、偏食指導）
- 衣服の着脱（着替え）、トイレ（おむつはずし）
- 自由遊び（おもちゃ遊び、遊具、関わり遊び）
- 運動会（ダンス、競技）、音楽会・劇（楽器の使用、動作、せりふ）

#### (2) 援助のポイント

##### ①スモールステップ

最初から何でも健常の子どもたちについて行かせようと思わないこと。例えば体操だったら、そのうちのいくつか分かりやすい動作だけ、模倣するよう促す。そうやって成功体験からスタートさせると、子どもも、教える側も強化されやすい。

##### ②プロンプト

最初は即時に十分な援助を行い、成功させる。そこから少しずつプロンプトを減らしていく。

##### ③強化

子どもの適切な行動を増やすのは強化の働き。園でもできるだけ強化子を用意する。

かといっておかしやお気に入りのおもちゃを持っていくことはむずかしいだろう。

そこで、

- ①ほめことば、②笑顔、③ボディータッチ、④席からの解放、⑤目立たない手いじりグッズ、⑥好きな活動

などが強化子として考えられる。入園前に家庭療育で、お菓子などの強化子とほめことばをセットで与え、その後、徐々にお菓子を間引くことによってことによって、ほめ言葉や笑顔を強化子にしておくことが必要。

### (3) 朝のルーティーン

・帽子を脱いで、自分のところにかけて、かばんを下ろして、ノートを出して...といった朝のルーティーンが声かけなしで、自分でできるようにする。

・「チェイニング」という方法を取る。

大人の指示ではなく、前の行動の結果が次の行動の「弁別刺激」になるように。

＜大人の指示が弁別刺激である場合＞

弁別刺激 (S<sup>D</sup>) → 行動 (R) → 結果 (S<sup>R</sup>)

「ノート出して」 ノートを出す 「えらいね」

＜前の行動の結果が次の行動の弁別刺激になっている場合＞

S<sup>D</sup> → 行動 (R) → 結果

かばんをおろす ノートを出す ノートが出てくる

S<sup>D</sup> → 行動 → 結果

ノートが出てくる ノートを先生に持っていく ハンコをもらう

・そのためには、前の行動の終了と同時に無言で次の行動をプロンプトする（身体を持って誘導、指さしなど）。一連の行動がすべて終了するまでほめない。プロンプトを徐々にフェーディングする。

### (4) 着席行動

Q. みんなが席にすわっているときに、席にすわろうとしない。すわってもすぐに立って走り回ったり、うろうろしてしまう。どうしたら？

・最初から、長い間ずっと座らせようとしなないこと。しばらくすわっていられたら、すぐに解放する（**スモールステップ**）。

・しかしすわらせている間は、立とうとしてもすかさず太ももを押さえて、立たせない（**プロンプト**）。それによって立つ行動にほうびを与えず、消去する。

・すわっている間は、時折、小声でほめてあげる。さらにできるだけ退屈しのぎになる物を用意して、席にいることを楽しくさせる（**強化**）。

・徐々にすわってられる時間を長くしていく。

### (5) 指示に従う

Q. 家では指示に従えるのに、園では先生の指示に従わない。どうしたら？

・家でできることを、園でもできるようにするためには、家の環境と園の環境の距離を縮めること。言い換えれば、家の環境を園に持ち込み、園の環境を家に持ち込む。

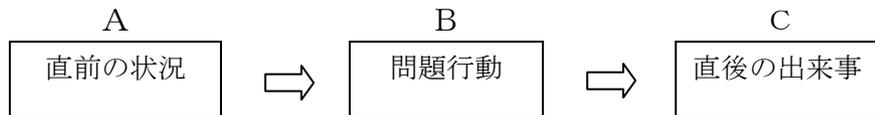
・「家の環境を園に持ち込む」つまり家で教えている親やセラピストが園に入って、最初は先生の指示を直接子どもに伝える。従えたら強化する。徐々に先生の指示に注意を喚起するだけにする。従えない場合は、軽く身体を抑える。

・「園の環境を家に持ち込む」つまり家でセラピストや家族あるいは近所のお友達に生徒役になってもらい、幼稚園ごっこをする。

## (6) 問題行動への対処

Q. 他の子をたたいてしまう。どうしたら？

・まずその問題行動がどんなときに起こっているか、問題行動の直後に何が起こっているか、を観察する。



・問題行動の結果、子どもが何か得するようなことが起こっていれば、それがその問題行動を強化していると考えられる。

お友達がかまってきてわずらわしい → お友達をたたく → お友達が逃げる

退屈である → お友達をたたく → お友達が泣く、先生が駆け寄る

・何がその行動を強化しているか、見当がついたら、まずその強化子を取り除くことを考える（消去）。

・先生に攻撃を加えても、極力反応せずに無視する。繰り返す場合は、黙って制止する。

・お友達をたたく場合は、それが起こりそうな時に極力、大人がそばについて、たたこうとしたりさっと制止する。するとたたくことによって生じる結果が生じないので、自然に消去される。

・消去と並行して、問題行動を起こしていない時や代替りの適切な行動が取れたときに強化する（DRO, DRA）。

・構われることが煩わしい場合は、「やめて」という言葉を教える。

・他の子どもものものがほしくなっても、勝手に取らないように、家でトレーニングする。我慢できたら強化。

・消去と代替行動の強化でうまく行かない場合は、軽い罰を用いてみる。

・他の子をたたいた直後にだまって身体を押さえて、1, 2分、その場で自由を拘束する。

・隅に連れて行き、壁に向かって立たせる（タイムアウト）

## (7) 偏食の指導

スモールステップと強化（漸次的接近法）

標的行動：嫌いな野菜の一切れを飲み込む

強化子：プリン

①くちびるにつけたら、好きなプリンを一口

②ベロで一なめしたら、好きなプリンを一口

③ベロの上に1秒置いたら、プリン一口

④ベロに置いて口を閉じられたら、プリン一口

⑤野菜一切れをベロに置き、プリンと一緒にごっくんできたら、プリンをもう一口